事件番号　　平成２８年（ワ）第２４０７号
事 件 名　　自衛隊南スーダンＰＫＯ派遣差止等請求事件
原　　告　　平　和子
被　　告　　国

準 備 書 面 23

２０１６年7月ジュバ・クライシスの実態－『あの日、ジュバは戦場だった　自衛隊南スーダンＰＫＯ隊員の手記』より

２０２１（令和3）年　1月２２日

札幌地方裁判所民事第１部合議係Ｂ　御中

原告訴訟代理人
弁護士　佐　　藤　　博　　文
弁護士　池　　田　　賢　　太
外

記

第１　本書面の目的

本訴訟においては南スーダンＰＫＯ派遣の真相と違憲性が問われており、原告は、２０１６年7月の「ジュバ・クライシス」（首都ジュバの危機）に遭遇した第１０次隊がその活動を記録した「日報」と現地隊員の健康状態を記録した「衛

生週報」について、一部非開示で開示された文書を証拠提出したのに加えて、今般、非開示部分の開示を求める文書提出命令申立を行なっている。

この第１０次南スーダン派遣施設隊の一員として南スーダンの首都ジュバに派遣されており、現場の活動状況を記録する立場にあった幹部隊員であった小山修一氏（２０１９年１等陸佐で退職）が、２０２０年９月、「あの日、ジュバは戦場だった　自衛隊南スーダンＰＫＯ隊員の手記」と題する本を、文藝春秋から出版した。

見出しを見ただけでも、「今日が、私の命日になるかもしれない」「これって完全にアウトでしょ」等と、現地での生々しい実態が報告されている。

そこで、原告は、本書を証拠提出する（甲Ａ２６９）とともに、７月８日から１２日の記述（「第２章　ジュバの長い４日間」）に絞って、その要点を引用し、主張に代えるものである。

第２　著者の地位と同著の基本スタンス

１　小山修一氏の地位は次のようなものであった（「はじめに」より抜粋）。

⑴　派遣前の私が本来所属していたのは、陸上自衛隊研究本部（２０１８年廃止）。そして、派遣施設隊本部での私の任務は、大きく２つあった。１つは、過去のＰＫＯなどから得た教訓を部隊や隊員に普及徹底すること。もう１つは、今回の活動状況から新たな教訓を見出し、それを陸上自衛隊の今後のさまざまな活動に反映させる資料を得ることだ。つまり、教訓という視座でサポートすることが任務であり、現場での作業は、平たく言えば「見て、聞いて、記録すること」そのものであった。

⑵　私は、ＰＫＯの歴史の真っただ中にいることを実感していた。そして、この事実は歴史として後世に残さなければならないという使命感に駆られ、個人ノートに克明に記録し、書き記した。

２　本著の基本スタンスは次のとおりである（「はじめに」より抜粋）。

⑴　国民が最も知りたかったことは、果たしてジュバ・クライシスで何が起きて

いたのか、自衛隊に何があったのか、という正確な事実だったのではないだろうか。その事実の中で大いに議論すれば良いのである。事実を公開したうえで、国民の衆目する国会の場で国を挙げて議論をすることこそが、民主主義の健全な姿ではなかろうか。

事実はうやむやにしてはならない。それを曖昧にしてしまうと、教訓を学ぶことすらできなくなる。現実にあったことが大したことではなかったとされ、誤魔化されているような気がしてならなかった。

⑵　ＰＫＯの場合、自衛隊の能力が推察されるような情報は極めて限定される。自衛隊のＰＫＯ活動には、当然のことながら「特別防衛秘密」や「防衛秘密」といった、いわゆる軍事機密に該当する事項はひとつもない。もともと戦闘を前提にした活動ではないからだ。国際平和協力活動に敵なぞ存在しない。

第３　「第２章　ジュバの長い４日間」からの抜粋引用

１　７月８日７時「安全を確保できる確信が取れない」モーニング・レポート（７８頁）

７月８日７時、モーニング・レポートが始まった。モーニング・レポートとは、主要幹部が集まり、その日の情勢や活動予定などを隊長に報告するとともに、隊本部幕僚と各部隊長の相互の認識を共有するために行う定例ミーティングである。私も毎日参加していた。

前日の７日２０時頃、ジュバ市内のグデレ地区で、政府軍兵士と反政府勢力兵士との激しい銃撃戦が発生。双方に死傷者が出た模様とのことだった(後に、政府軍の検問所で反政府勢力の車両が停止させられ、日頃の確執から口論となり、銃撃戦に発展。政府軍兵士３人が死亡、反政府勢力の将校２人が負傷したことが判明)。

同じ頃、３０発以上の射撃音が宿営地からでも確認できた。市内では緊張状態が続いているようだった。

「反政府勢力が政府軍に報復攻撃をするかもしれない。安全を確保できる確信が取れない。したがって本日の宿営地外の活動を中止する」

会議の席上、隊長は活動の中止を決心し、各部隊長に企図を明示した。本来ならば、この日の主要な任務(タスク)はUNハウスの道路補修を行う予定だった。だが隊長は前日の街の不穏な動きからリスクを評価。不測の事態を予期し、作業は見送り、宿営地内での任務に変更された。

約１０キロメートル離れたUNハウスに行くためには、街中を車両で４０分移動しなければならなかったからだ。

通常、任務は前日のうちに各部隊長に命令下達し、部隊に所要の事前準備を行わせ、当日の朝までの最新情報を踏まえて状況を判断し、柔軟に変更していた。特にセキュリティ情報については細心の注意を払っていた。隊員の安全、生命に関わるからだ。

隊長には情報センスがあり、ちょっとした兆候さえも見逃さず、情報の読みも深く鋭かった。隊長は、部下隊員の全員を無事に帰国させることで任務が完遂されるという強い信念を持っており、出国前に隊員家族に対しても堅く約束していた。

２　７月８日１７時３７分「大統領府方向から大きな黒煙が上がっている」（７９頁）

７月８日午後、ジュバ市内の大統領府では、キール大統領とマシャール副大統領が明日の独立記念日に向けて和平合意を遵守するという公約を相互に再確認していた。独立記念日の公式記念祝賀行事は、これまで毎年行われていたが、この年は予算不足のため開催しないことになっていた。

７月８日１７時２７分、大統領府の外では、キール大統領の警護兵とマシャール副大統領の警護兵が口論の末に発砲。激しい銃撃戦が巻き起こっていた。ちょうどその頃、大統領府の中では記者会見が開かれ、キール大統領が声明を発表するところだった。キール大統頑は「(独立記念日前に)激しい銃撃戦が起こるとは予想していなかった。何の意味があるんだ」と怒りをあらわにしたという。

同時刻、日本隊宿営地でも、いつもと違う激しい射撃音が街中から聞こえて

きた。ちょうど隊員が一日の仕事を終わらせようとしていた時だった。

直ちに隊本部にある国連無線から、ＵＮＭＩＳＳの指示が一斉放送で流れた。

「街の中心部で銃撃戦があった模様。国連職員は自宅待機せよ」

しばらくすると、今度はＵＮＭＩＳＳのセキュリティ・アラート・レベルを通常より、ワンランク引き上げる旨の一斉放送が流れた。ＵＮＭＩＳＳ文民職員の不必要な移動を制限する指示だった。

激しい射撃音は鳴りやまなかった。

「大統領府方向から大きな黒煙が上がっている」

１７時３７分、日本隊宿営地の監視タワーの警備隊員より、作戦室に素早い一報が入った。

夕暮れ時の美しい空に、不気味な大きな黒煙が舞い上がっていた。車か何かのガソリンが燃えているのだろうか。大統領府や街の中心地では何らかの銃撃戦が起きているようだった。

続いて１７時４１分、日本隊宿営地が所在するＵＮトンピンの周辺でも、大きな射撃音が鳴り響いた。

３　７月８日１８時頃　ＪＩＣＡ車両、帰路に銃撃を受ける（８１頁）

「Attention！（アテンション！）Attention！」

１８時、隊本部にある国連無線から注意を呼び掛ける一斉放送が流れた。オペレーターの英語はインド訛りの独特のアクセントだ。ＵＮＭＩＳＳの通信は、インドの通信部隊が担っていた。

「セキュリティ・アラート・レベルをさらにワンランク引き上げる」

ＵＮＭＩＳＳ文民職員の、安全地帯での待機指示だった。国連無線からの指示が日本隊の緊張感を一気に高めた。これほどまで高くセキュリティ・アラート・レベルが上がったのは、ＵＮＭＩＳＳ発足以来、ジュバでは初めてのケースだった。

「やばいことになりそうだ」

隊本部の幕僚たちの反応だった。

一方、その頃、ジュバの中心部では政府軍と反政府勢力の間で激しい銃撃戦が展開されていた。１８時頃、ＪＩＣＡ（国際協力機構）の日本人職員４人の乗った車両が、ＪＩＣＡ事務所から宿舎に帰る途中、何者かに銃撃を受けていた。不幸中の幸いか、防弾車のため人的被害はなく、難を逃れた。狙われて撃たれたのか、あるいは　偶然、流れ弾に当たったのか、どちらなのかは定かではない。

隊長の読みは現実的なものになった。もし、日本隊が今日、ＵＮハウスで施設活動を行っていたら、帰路に銃撃戦に巻き込まれていたかもしれなかった。隊長の判断ひとつが隊員の生死を左右するといっても過言ではなかった。

１９時頃になると、政府軍のＭｉ（ミル）－２４「ハインド」攻撃ヘリコプター２機が上空を旋回していた。

後に、先にも、攻撃ヘリがジュバ上空を飛んでいるのが確認されたのは、ジュバ・クライシスの時だけだった。

同じころ、ＵＮトンピンの北に位置する政府軍のビルファム基地から兵士を乗せた多数の車両や戦車が、日本隊宿営地の西側に沿ったビルファムロードを市内に向かって前進して行くのが確認された。

その後も、射撃音や爆発音は鳴りやまず、その度に国連無線から慌ただしく注意喚起が促された。

４　７月８日夕　国連施設に避難民が殺到（８２頁）

大統領府近傍で始まった銃撃戦は、徐々にジュバ市南西方向に拡大していった。特に国連施設の多いＵＮハウスでは、激しい銃撃戦の様子と混乱ぶりが窺われた。

ＵＮハウスから１キロメートル未満の所にあるジェベル地区には、反政府勢力の活動拠点があった。２０１６年４月に反政府勢力（ＳＰＬＭ／Ａ-ＩＯ）のリーダーであるマシャール氏がジュバに帰還して副大統領に就任した際に、南スーダン政府やＵＮＭＩＳＳ関係者などの強い反対意見を押し切り、反政府勢力の軍隊（ＳＰＬＡ-ＩＯ）１３７０人を引き連れ、この地に駐屯させたのだった。

政府軍はその活動拠点を重砲、迫撃砲、攻撃ヘリコプターを使用して攻撃。ちょうど両陣営に挟まれたところにあるUNハウスは、その激しい銃撃、砲撃戦の巻き添えになっていた。

UNハウスには、避難民キャンプ(ＰＯＣサイト１、ＰＯＣサイト３ Protection of Civilians Site文民保護施設)が付帯施設として隣接し、約２万７千人以上の国内避難民が収容されていた。

避難民が住む白色のビニールシート製のテントを、銃弾は容易に貫通する。またキャンプの中にはわずかな窪みがある程度で、銃弾や砲弾から身を護るような遮蔽物や安全な場所はどこにもなかった。

約５千人の避難民が国連に保護を求め、避難民キャンプから排水口をくぐり抜け、或いはフェンスを乗り越え、パニック状態になりながらUNハウスに殺到し、国連施設の内部まで乱入していた。

フェンスの上部には有刺鉄線が設置されていたので、避難民は怪我をしないように有刺鉄線をベッドマットレスで覆い登ってきたが、手や足に切り傷や刺し傷を負って怪我をした人も多数いたという。

UNハウスの敷地内には、鉄筋コンクリート製の建物や、金属製の格納庫など多数の頑丈な建造物、土嚢などの遮蔽物があったので、弾除けには十分に効果があるだろう。避難民は国連職員の居住地区にも押し寄せ、職員宿舎のドアや窓をドンドンと叩き、建物の中に入れて欲しいと懇願しているようだった。UNハウスの国連職員の居住地区でも、混乱している様子が推察された。

「国連職員は屋内に退避し、窓から離れ、低い姿勢を取るように」

国連無線から一斉放送で指示が出される。避難民の保護よりも、むしろ国連職員自身を守るのが精一杯だったのだろう。

日本隊は一切、外部に出ることなく宿営地内で屋内退避していたので、射撃音と国連無線、電話、メールによる情報でしか外部の様子は窺い知れなかったが、ジュバ市内の至る所で激しい銃撃戦が展開されていることは容易に推測できた。政情不安定な国は一夜にして情勢が急変する。そもそも国連ＰＫＯが展開しているアフリカの国とはそういう場所なのだ。

5　7月１０日１１時6分　日本隊宿営地近傍で激しい衝突が始まる（８８頁）

衝突が激しさを増したのは、建国記念日の翌日、１０日だった。朝にはUNハウス内で数発の迫撃砲弾の爆発も確認された。

昼の１１時６分、日本隊宿営地に隣接している通称トルコビル周辺で、政府軍と反政府勢力の激しい銃撃戦が開始された。

「ヌエルＳＰＬＡ」と呼ばれる反政府勢力がトルコビルを占拠し、高層階からの優位な態勢で下方の政府軍兵士や車両を射撃していた。日本のメディアでは単に「反政府勢力」と呼ばれていたが、同じ南スーダン政府軍の中の、小数派であるヌエル族の一派である。

９階建てのトルコビルは、周囲に他の高層ビルが存在しないことから、四周、遠方の見渡しが良かった。このビルからはジュバ空港、ＵＮトンピンはおろか、日本隊宿営地の内部までを完全に見通すことができた。さらには鉄筋コンクリート製で、立てこもるには十分頑丈な建物だった。

日本隊宿営地からトルコビルまでの距離は約１００メートル。日本隊宿営地からは、イラク派遣でも実績のある監視カメラによって、状況はリアルタイムで鮮明に視認できた。作戦室にはモニターが設置され、常時、周囲を監視できるようになっていた。

日本宿営地の外柵沿いには、ルワンダ歩兵大隊の戦闘装甲車と兵士らが、フォース・プロテクション（警備部隊）として、日本対宿営地を直接防護するようなフォーメーションで張り付き、トルコビル方向を常時、警戒監視していた。ルワンダ隊は、アフリカ諸国の軍隊としては珍しく真面目で、規律正しく頼りになる存在だった。

外柵の奥にあるビルファムロードに向けた監視カメラには、あわただしく散開する政府軍兵士、地面に備えられた迫撃砲、大きな荷物を持って逃げ惑う避難民、上空を旋回する攻撃ヘリコプターが映し出されていた。リアルな緊張感が伝わってくる。ある隊員は、モニターに映し出された殺害シーンを視認し、衝撃を受けた。これは映画やテレビの再現映像ではない。今まさに現実に起き

ていることだ。

しばらくすると、政府軍の反撃が開始された。「ドーン」「ズシーン」と大きな衝撃音が上がり、その衝撃に呼応して、地面と日本対宿営地の建物全体が、床も壁も天井も一斉に「グラグラッ」と大きく揺れた。私の身体全体にも大きな振動が走った。勤務隊舎の執務室にいた皆が動揺し、お互いに顔を見合わせる。砲弾の着弾がとても近い。日本対宿営地のどこかに砲弾が着弾したのか。大丈夫なのか。最初は誰しもがそう感じたに違いない。

主要な幹部が状況把握のため、作戦室に集まってきていた。私も同様に作戦室に向かう。一瞬の出来事に何が起きているのかもわからず、大きな衝撃音と振動の度に、室内では驚愕と不安の言葉にならないどよめきが上がっていた。

作戦室のモニター画面に政府軍のＴ－７２戦車が映し出された。反政府勢力が立てこもっているトルコビルの上階に向け、戦車砲が火を噴く。再び「ドーン」と大きな衝撃音か上がり、着弾音とほぼ同時に大地の震動が建物に共鳴した。日本隊宿営地の傍でどのように砲撃が行われているのかがわかった。

モニター映像からは、戦車砲弾がビルの７階を直撃し、大きな黒煙が舞い上がり、コンクリートの破片がバラバラと飛散しているのが確認できた。砲弾は反政府勢力が立てこもるトルコビルの７階に大穴を開けた。中には先ほどまで射撃していた反政府勢力の兵士がいたはずだ。戦車砲の威力で恐らく、兵士の身体は木端微塵になったことだろう。

6　バングラデシュ工兵隊、　ＰＫＯ部隊による応射（９０頁）

続いて小銃や機関銃による激しい応戦が始まった。

「パン、パン、パン」と小銃の単射による乾いた銃声。続いて「トトトトト」と機関銃の連射による響き。銃声がとても間近に聞こえる。まるで隣で撃ち合っている感覚だ。これほどの距離感で銃声、砲声を聞くことは訓練以外では初めての経験だった。

機関銃の大きな連射音が間近に聞こえた。激しい機関銃連射の弾道の軌跡が視認できる。日本隊宿営地の前に防護態勢をとっているルワンダ歩兵が何やら

動き始めたのがモニターから見て取れた。

「何でルワンダ隊は撃ってんだよ。宿営地(日本隊を含む)に撃ち返されるじゃないか」

隊長は怒った口調で行き場のない怒りをぶつけていた。

撃たれたら撃ち返すのが軍事の常識だ。もし、政府軍や反政府勢力から撃ち返しがあったら日本隊に被害が生じる可能性がある。隊長は日本隊が撃たれることを懸念していた。

しかし、モニター映像を確認してみると、ルワンダ隊が射撃している様子はまったくなかった。あとでわかったが、現実にルワンダ隊は一発も撃っていなかった。ただ激しい衝突が生起しているトルコビル方向を警戒監視しているだけだった。傍らにいるルワンダ隊が応射しているのではないかと錯覚するほど、射撃音が間近で聞こえたのだ。

当時は他国軍との定まった通信連絡手段もなく、他国軍の対応状況はまったくわからなかった。だが、その頃、日本隊の宿営地がある同じUNトンピンで、反政府勢力に対して応射している部隊がいた。日本隊宿営地の近傍に所在するバングラデシュ工兵隊だった。

後でわかったことだが、トルコビルを占拠していた反政府勢力兵上の機関銃が、バングラデシュ隊の宿営地に向けて、射撃。居住施設、監視所などが被弾した。バングラデシュ隊は、反政府勢力の機関銃位置を特定し、トルコビルに直接、小銃による応射を合計４４発、繰り返した。女性と子供を含む多数の避難民が逃げ回り、危険に晒されていたという。多くの避難民が国連の保護を求め、 UNトンピンの中に命からがら逃げ込んでいた。

UNトンピンに逃げ込む際、それを妨害するかのように何者かに撃たれた、という多くの避難民側の証言がある。さらには、UNトンピンに辿り着く前に、政府軍兵士により民間人が射殺された、との多くの目撃証言もあった。

「銃撃を受けて状況は悪化、避難民はパニック状態に陥っていた。我々は避難民と自分たちの身を護るためにも、撃ち返さなければならなかった」

後日、バングラデシュ隊の副隊長は、当時のことを振り返った。

7　「総員、屋内に退避せよ」退避行動に徹する日本隊（９２頁）

「総員、屋内に退避せよ」

隊本部から、各部隊と隊員に対して、退避指示が出された。

各隊員は双方の激しい衝突による流れ弾に巻き込まれないよう、素早く屋内に退避する。銃声と砲声が鳴り響く中、ヘルメットと防弾チョッキを着用し、銃声、砲声、爆発音が鳴り止むまで、低い姿勢でずっと耐え忍んでいた。

隊本部の執務室では、伏せている上半身の上に更に防弾盾を載せて身を護った。もし、流れ弾が飛んできたとしても、防弾チョッキと防弾盾の二重で急所を防護しているので、小銃程度の弾丸であれば、致命傷には至らないだろう。そう想像し、私自身は内心、それほどの恐怖は感じていなかった。防弾盾は片手では操作できないほど重かったが、この重さがむしろ安全の担保のように感じられた。また、周囲に仲間がいたことも、精神的に落ち着ける要因だった。

隊本部要員は、作戦室のモニター映像により、ある程度、周囲の状況を把握していた。政府軍と反政府勢力の激しい衝突が国連に向けられているものではないことは明白であり、直接の攻撃対象ではないという安心感はあった。ただ、その近さゆえに、激しい衝突や流れ弾の巻き添えになるのではないかとの不安は少なからずあった。

一方、自分の居住コンテナで退避している一隊員にとっての情報源は、間近に聞える銃声、砲声、爆発音の音響を聴覚で、大地と建物をも揺るがす戦車砲の射撃、砲弾の着弾の振動を身体で感じ取ることのみであった。隊員の居住コンテナの窓は完全に遮光され個人では開けられないように完全に固定されていた。遮光しないと夜に大量の虫が集まるためである。

外で一体、何が起きているのか。まったくわからなかっただろう。

8　「今日が、私の命日になるかもしれない」（９３頁）

小さなコンテナハウスが隊員居室になっていた。幹部は２人部屋、准尉・曹士隊員は３人部屋だ。狭い居室はただ寝るだけの空間でしかない。基本的には

野外ベッドと被服と装具を入れる個人用コンテナが２個あるだけだった。

しかし、狭いながらも常に綺麗に清掃され、ベッドの周辺には生活用品が整理整頓されている。殺風景な白色の壁には隊員の個性が感じられる飾りつけをしている部屋もあった。家族や子供の写真を壁に貼っていることも多かった。

居室退避している隊員の中には、居室に一人取り残され、孤独と闘っている者や、日本隊宿営地が狙われているのではないかと不安に襲われ、死を意識した者がいてもおかしくはなかっただろう。また、これまでの経験からリスクを感覚的に理解し、リスクに敏感であればあるほど恐怖を感じていたのかもしれない。しかし、一般的な日本人のようにリスクに鈍感であれば、あまり恐怖を感じなかったかもしれない。リスクに鈍感な人は、その先の絵図を見通すことができないからだ。

居室退避の解除指示が出されるまでは一切、屋外に出ることは許されない。外部の情報は一切入ってこない。

居室の中で家族の写真を、万感の思いで見つめていた隊員もいただろう。誰しもが最期に見たいのは、自分の家族の顔や、美しい故郷の風景であろう。緊迫した時間だけが刻々と過ぎていった。時間の経過とともに不安が募って来たことだろう。

「今日が、私の命日になるかもしれない。これも運命でしょう。家族には感謝しきれん。笑って逝く」

ある隊員は自分の愛用する手帳に家族に宛てた言葉を震える手で書き記した。「妻へ　あとはよろしく頼みます。息子へ　お母さんを助けて、お父さんの代わりに家のことを守ってください。勉強もガンバレ。お父さんより」

家族に最期の手紙を書いた隊員もいたという。隊員にはパソコン、タブレット、スマートフォンなどの個人携帯型の情報端末の所持が認められていたので、家族や友人に国際電話をかけることや、電子メールを送信することも可能だった。しかし、逆に余計な心配をかけさせたくないとの思いから、多くの者が現実に起こっていることを直接伝えるのを控えた。

「ここで死ぬわけにはいかない」

談話室にいたある隊員は、自分の周りをとり囲むようにソファを防護壁のように立て、低い姿勢で我が身を守った。彼がその場で叫嵯に思いついた最も効果的な防弾処置だった。恐怖と不安のあまり、藁にも縋る思いだったのだろう。

「もし隊員の身に何かあったら、その家族に何と言えばいいのか」

隊長は万が一のことを考えていたという。派遣元の第７師団長の要望事項、「任務完遂・無事帰国、みんな笑顔で無事帰る」の言葉が一層、心に重くのしかかったに違いない。

日本隊宿営地から少し離れた、ジュバ市内の民間宿泊施設（通称オーストラリア・ハウス）に居住していたオーストラリア軍の連絡将校からも連絡があった。オーストラリアハウス周辺でも、大きな銃声が聞こえ、彼らも外には出られないとのことだった。

激しい射撃音と大地を揺るがす爆発音は夕方まで続き、夕方以降は静粛さを保ち、トルコビルでの激しい衝突は一旦、終結したかのように思えた。

９　７月１０日１８時３９分　中国歩兵大隊の車両に砲弾が直撃、隊員２人死亡（９５頁）

ＵＮハウスでは、朝から政府軍と反政府勢力との激しい衝突が続いていた。銃弾や砲弾はＵＮハウスや避難民キャンプの内部にも容赦なく被弾していた。身を隠す術のないテント暮らしの避難民を突然、銃弾や砲弾の雨が襲った。

ＵＮハウスと避難民キャンプ警備の任に就いていた中国歩兵大隊のＰＫＯ隊員は、小銃、機関銃のみならず１２．７ミリ重機関銃、３０ミリ自動擲弾銃といった重火器を用いた応射を繰り返し行っていた。

「フォース・プロテクシヨン（警護部隊の中国歩兵大隊のこと）、早く来てくれ！」

国連無線が何度も呼びかけていたので、ＵＮハウスの現場での混乱と緊迫状況が窺い知れた。

余程切羽詰まった激しい衝突だったのだろう。一説によると、国連に対し、

好意的でない政府軍兵士らが偶然を装い、故意にUNハウスを狙って射撃していたのではないかという噂も出ていた。

しかし、衝突が激しさを増すと、中国歩兵大隊のＰＫＯ隊員は、所定の警備配置を完全に放棄し、武器、弾薬をその場に残置したまま、持ち場から退避したという。避難民キャンプの境界沿いの監視塔には適切な防弾処置がなされていなかったため、そこに配置されていた隊員は監視任務を放棄し、下の側溝や車両に避難した。しかし、単純に彼らを責めるわけにはいかない。まずは自らの身は自らが守らなければならない。これが兵士の基本だ。

UNハウスに隣接する国連避難民キャンプにいる人々は、本来、文民保護の任務を有するＰＫＯ隊員に完全に見捨てられ、無防備状態になっていた。すでに相次いで死傷者が出ていた。側溝の中で家族と一緒に身を隠していた女性や小さな子供たちも、流れ弾に当たり死亡した。

１０日１８時３９分　避難民キャンプの境界線の後方に、退避していた中国歩兵大隊の装甲歩兵戦闘車に砲弾が直撃。

後に写真で確認したが、被弾の位置と角度、破壊形状から判断して、おそらく８２ミリクラスの迫撃砲弾が命中したものと考えられる。これは政府軍が意図的に迫撃砲火力をUNハウスに指向したか否かは別として、ＲＰＧ（携帯対戦車ロケット弾）で直接狙われたのではなく、たまたま運悪く迫撃砲弾が車両の前部に命中したものと推測される。迫撃砲は曲射火力のため、装甲目標への直接照準射撃や精密誘導射撃はできない。

車中にいた若いＰＫＯ隊員２人が死亡するとともに、双方の激しい衝突に巻き込まれ、５人の隊員が重軽傷を負った。

２人の死亡隊員のうち１人は、重傷を負った後、適切な治療を受けることができずにUNハウスに放置され、約１６時間後、出血多量により死亡した（負傷時刻１８時３９分、死亡確認時刻翌朝１０時５２分）。適切な治療さえ受けていれば、助かっただろうと言われている。

UNハウスには外科手術チームは存在せず、血液バンクも保有していなかった。ＵＮＭＩＳＳのレベル２病院（簡易的な外科手術が可能）はUNトンピン

の方にある。負傷者の緊急搬送の態勢が未整備だったのみならず、UNハウスから約１０キロメートル離れたUNトンピンの病院までの搬送経路は、政府軍が至る所で検問を敷き、完全に道路を封鎖しいていた。途中、交戦に巻き込まれることも十分に予想できた。UNトンピン所在のルワンダ航空隊では、ロシア製ヘリコプターＭｉ－１７が緊急患者空輸のため常時３０分待機態勢を取っていたが、なぜ活用されなかったのかは疑問だ。飛べない理由が何かあったのか、あるいは中国隊の誰もそういう輸送手段があることを知らなかったのか。

なお、UNトンピンのレベル２病院で対応できない高度な病院治療を必要とする場合、航空機により、隣国のウガンダ、あるいはケニアの病院に後送しなければならない。

他方、街の中心部のグデレ地区や、UNハウス周辺のジェベル地区でも、激しい衝突に多くの市民が巻き込まれ犠牲者を出していた。

グデレ地区のブロック９では、政府軍の戦車が意図的に一般家屋を蹂躙し、中で避難していた女性１人が轢き殺され、２人が負傷した。

また、同地区で政府軍の攻撃ヘリコプターがロケット弾２発を発射。１発が一般家屋の部屋を直撃。部屋の中で避難していた家族のうち、６歳の少女が死亡、５人が重傷を負った。

犠牲者の多くは、砲弾の破片、流れ弾の銃弾により死傷した。死傷者の中には女性や小さな子供も多数含まれていた。

10　現地から日本への正確な状況報告（１００頁）

「部隊は屋外活動を完全に中止し屋内退避をしている。隊員に異状なし」

部隊と隊員の安否情報を、上級司令部(中央即応集団司令部、統合幕僚監部)に報告。隊員が全員無事であることは、日本にとって何よりも重要な情報だった。

日本隊は、これまでの状況について逐次、情報を整理して上級司令部に報告を続けていた。陸上自衛隊の指揮システムを通じた電子メールによる定期報告

の「日報」を始めとして、自動即時電話、部内系インターネットといった、あらゆる通信手段を使って地球の裏側で起きている事実を正確に報告していた。

宿営地周辺の激しい衝突の記録映像も、リアルタイムではなかったが、画像データとして動画配信を行っていた。南スーダンと日本の間には常時、衛星回線により音声、データ通信が可能だった。このような通信はＳ二尉率いる通信班が「必通の信念」をもって２４時間態勢で維持、運営を行っていた。

また、現地部隊は武力衝突の発生とほぼ同時期に、クロノロジーをつけていた。クロノロジーとは現在、何が起きているか、そして部隊が何をしているのかを時系列（分刻み）で整理し、情報システムに記録としてアップすることである。そうすることで、日本にいる上級司令部でもほぼリアルタイムで現地の状況が分かるシステムになっていた。

この克明な記録は、その後の日報などの報告文書を作成する際の基礎資料になる。この業務は第２科（情報）と第３科（作戦、訓練）の尉官か上級陸曹が担っていた。準備訓練においても徹底して鍛えられており、誰の指示がなくとも自発的に行われるようになっていた。

現場がやるべきことは、上級司令部に対し、見たまま、聞いたままの、今現在、何が起きているのか、という事実を正確に伝えることだった。

このような緊迫した状況では政治的な判断が要求される。上級司令部の状況判断、日本政府の意思決定をミスリードさせないためにも、現場の正確な情報が必要だ。

しかし、現場の激しい銃砲声や、爆発の振動、緊迫感といった、言葉や文章では表せない、そのリアルな現実は、なかなか伝わりづらかった。現地と日本との物理的な隔たり、約１万１千キロメートルの離隔距離や６時間の時差（現地時間は日本時間－６時間）といったものが中央との温度差を開かせていた。

11　７月１０日２１時頃「日本隊宿営地が攻撃される可能性がある」幹部会議（１０４頁）

１０日２１時頃、指揮官、幕僚などの主要幹部が作戦室に集められた。私もその場に居合わせた。

作戦幕僚たる第３科長のＹ三佐から、最新の状況や今後の対応についての説明があった。

「日本隊宿営地が攻撃される可能性がある」

一瞬にして、その場の空気が凍りついた。皆が覚悟を決めたような真剣な表情になった。

セクターサウス司令部によると、日本隊宿営地前のテントにいる避難民の中に、反政府勢力の高級幹部が紛れ込んでいるという。そのようなことから政府軍が、その反乱分子の狩り出しのため、国連施設に対し攻撃を仕掛けてくる可能性があるというのだ。可能性は決して高くはないが、完全に否定する材料は何もなかった。

政府軍にしてみれば、反政府勢力の首謀者たる高級幹部を、「文民保護」という名目で匿っている国連は、好ましい存在とは言い難い。本来、中立であるべき存在の国連が反政府勢力側に加担していると思われても、決して不思議ではなかった。

逆のケースもあった。

２０１３年１２月の内戦時には、南スーダン東部のジョングレイ州アコボで、反政府勢力に扇動された約２千人から成るヌエル族の武装勢力が、ＵＮＭＩＳＳ施設を襲撃。中にいたのはディンカ族の避難民３０人で、少なくとも１１人が死亡した。警備の任に就いていたインド歩兵大隊のＰＫＯ隊員２人が死亡、１人が重傷を負った。

南スーダンでは地方によって、部族の勢力、パワーバランスが異なっている。北部や北東部地域はディンカ族よりもヌエル族の方の勢力が勝り、ボルやマラカルといった地方都市では、ジュバとは逆にディンカ族が標的になっていた。

ちなみに、日本政府の見解で反政府勢力はＰＫＯ参加５原則の紛争当事者、

つまり「国家に準ずる組織」ではない、とした理由の一つに、「支配地域を持たない」とする見方があった。しかし、北部地域では圧倒的に反政府勢力側のパワーが勝っており、当然、住民も反政府勢力側を支持している。そもそも、この地域で小競り合いや武力衝突が散発していたのは南スーダン政府(軍)のコントロールが十分に行き届いていなかったからに他ならない。

これまでも、たとえUNMISSの施設内であっても、避難民が敵対部族に襲われ、殺害されたことは何度かあった。過去にも起こり得たことは、再び起こる可能性がある。今までは、我々が狙われているわけではないと安心し切っていた面もあったが、今後は双方の衝突に巻き込まれるリスクがないとは言い切れなくなってきた。

もし、政府軍兵士がUNトンピンの国連宿営地に侵入してきたならば、どうするのか。宿営地の防護は歩兵部隊の役割であり、同じ宿営地にいるルワンダ隊が担うことになる。だが、国連宿営地の外柵と日本隊宿営地の外柵の間の距離はわずかしかない。

万が一、武器を持った政府軍兵士が日本隊宿営地の中に乱入し、容赦なく撃ってきたらどうするのか。自衛のために必要最小限の武器を使用しなければならないだろう。

後日、ルワンダ隊の作戦幕僚は、もし政府軍がUNトンピン内に侵入、攻撃をした場合UNMISSの交戦規定(ROE)に基づき行動し、反撃する準備があったことを我々に明かした。

12　7月10日深夜 UNMISSから宿営地共同防護の打診（116頁）

その日の深夜のことだった。

「日本隊を宿営地防護の予備隊として運用したい」

セクターサウス司令部から、日本隊に対し任務の打診があった。作戦部長(ガーナ軍)が、日本隊をUNトンピンの宿営地の共同防護部隊として運用したしということだった。

後でわかったことだが、日本隊宿営地に隣接するバングラデシュ工兵隊は、

ジュバ・クライシスを通じて小銃射撃を４４発も撃っていた。バングラデシュ隊は日本隊と同様に工兵（施設）部隊の技術集団であり、交戦することを前提に編成されている歩兵部隊ではない。

後日、バングラデシュ隊に話を聞くと、次のような顛末だった。

「トルコビルを占拠する武装勢力が機関銃で我々の宿営地を撃ってきた。その結果、車両の窓が割られ、居住施設、屋上の給水タンク、監視所などが被弾した。我々は自らの存在を示すために、彼らのいるトルコビルに向けて直接、単発射撃を行った。またトルコビル周辺を逃げている多数の女性、子供を掩護するためにも、撃たれる度に１～２発の射撃を行う応射をせざるを得えなかった」

バングラデシュ工兵隊は警告射撃と言っていたが、これはＵＮＭＩＳＳの交戦規定や日本隊が定義している警告射撃とは概念が異なっていた

警告射撃とは、端的に言えば、「これから武器を使って本当に撃つぞ」という警告、または前触れとしての射撃であり、射撃というよりも、むしろ相手に知らせるための音響信号的な性質のものである。バングラデシュ工兵隊が言っている威嚇や掩護を目的に相手に直接指向するような射撃は、実際に相手に命中したか、しないかは別として十分に危害を与えかねない射撃であり、警告射撃よりもランクが上の危害射撃になるだろう。このように国によって解釈が異なるのもＰＫＯミッションの多様性の一つである。

しかし、バングラデシュ工兵隊が急迫不正な侵害を至当に判断し、そのうえで射撃したのであれば、それは正当な行為といえ、決して非難されるものではない。

中力隊長は帰国後、東京新聞の取材で「後からバングラデシュ隊が発砲したと知り、なんてことするんだと思った。相手に宿営地を攻撃する口実を与えてしまうところだった」と当時を振り返った。もし、日本隊が一発でも撃っていれば、日本国内では「南スーダン自衛隊ＰＫＯ部隊交戦」と新聞の一面をセンセーショナルな大きな見出しで飾っていたであろう。また政治的な問題にも発展していたに違いない。

自衛隊と外国軍では射撃の意識、引き金の重さにもギャップがあるのが現実だ。

しかし、バングラデシュ隊がこのように奮戦しているさなか、セクターサウス司令部が同じ宿営地にいる軍事組織として、日本隊に共同防護の任務を期待するのは当然だった。セクターサウス司令部は日本隊に直接命令する権限を有していないので、同じ宿営地にいるＰＫＯ部隊として協力して欲しいということだった。宿営地の外柵沿いには歩兵部隊が２４時間態勢で張り付いており、不測事態などに柔軟に対応できる予備隊が必要だったのだろう。

当時の１０次隊には「宿営地の共同防護」の任務は認められていなかったし、訓練も行っていなかった。だから、これに応ずるわけにはいかなかった。日本の政治事情を説明し、丁重に断った。良いか悪いかは別として、日本隊は宿営地の共同防護についてはまったく何もしなかった。

これがたとえ指揮系統上のＵＮＭＩＳＳ司令部からの命令であってもこれに応ずるわけにはい。

13　７月１１日６時３５分「これって完全にアウトでしょ」政府軍の攻撃再開（１２１頁）

夜が明け、１１日の朝を迎える。眩しい朝日がゆっくりと昇っていく。

朝には昨日の衝突で中国隊の隊員が亡くなったという情報が日本隊にも入り衝撃が走った。私は驚きと同時に、同じＰＫＯ隊員として悲しい気持ちになった。

日本隊宿営地近傍のトルコビルでの激しい衝突は、決して終わってはいなかった。

早朝の６時３５分以降、ＲＰＧ（携帯対戦車ロケット弾）を持った政府軍兵士らがビルファムロード沿いに前進し、トルコビル周辺に散開。歩兵の先導に引き続き、Ｔ－７２戦車２両が進入してきた。戦車砲による射撃音、迫撃砲弾着の爆発音、機関銃の激しい連射音がけたたましく鳴り響いた。

監視カメラの映像には、政府軍兵士がビルファムロード沿いの民家で略奪を行っている様子や、民間人を激しく殴打する暴力シーンも映し出されていた。

この日、日本隊宿営地の近傍に所在するルワンダ歩兵大隊の宿営地には、砲弾３発が着弾。そのうちの１発がルワンダ隊長の執務室を直撃、隊長は難を逃れたものの、ルワンダ隊員２人と保護されていた避難民５人が重軽傷を負った。

その頃の私は、大音響と振動には慣れてしまい、昨日ほどの恐怖は感じなくなっていた。感覚が麻痺していたのかもしれない。また、射撃音を冷静に聴き分けていた。どちらの射撃かわからないが、機関銃手の技量はそれほど高くはなかった。機関銃の撃ち方には、６発連射などの一定のリズム感がなかったからだ。機関銃射撃は連射をコントロールする引き金の指切りが重要であり、リズム感をもって撃つことが基本だ。多数の弾薬を連射すると反動で銃口がぶれて弾丸が目標に当たらなくなる。

銃撃戦、砲撃戦の激しさが増す度に、隊員たちは幾度となくシェルターへの退避行動を繰り返した。昨日までは各隊員の居室などの屋内に退避をさせていたが、あまりの激しさとUNトンピンが政府軍に攻撃される恐れがあったため、より防弾効果の高いシェルター退避に移行された。シェルターは防弾効果の高いヘスコ防壁(米国ヘスコ社製の大型土嚢)で囲まれ、比較的頑丈な造りになっていた。ヘルメットと防弾チョッキを身に着け、ここにいる限りは死傷しないだろうという安心感はあった。

隊員たちは終始、冷静だった。不測事態に備えた退避訓練は、国内での準備訓練はもとより、現地に到着後も直ちに行われ、退避場所のシェルター位置や退避行動は全隊員に徹底されていたからだ。隊長はこれまでも安全確保対策については最も優先して取り組んでいた。退避シェルターは各部隊単位で割り当てられており、人員の掌握が容易だった。仲間の誰かがいなければすぐにわかるようになっていた。

退避の際はヘルメットと防弾チョッキを着用したまま、水とスナック菓子な

どの食べ物をバッグに詰め込んだ。いつ銃撃戦、砲撃戦が終わりシェルターから出られるのか誰もがわからないからだ。

政府軍兵士が遂に宿営地内に侵入しているのではないかと思えるほど銃声が間近に聞こえることもあった。長い時間、シェルターの狭苦しい空間で銃声、砲声が鳴り止むのを皆でじっと耐え忍んでいた。重い空気のまま、ただ長い時間だけが過ぎていく。

「これって完全にアウトでしょ」

狭いシェルターの中で声が聞こえた。苛立ちを隠しきれない口調だった。

ＰＫＯの参加５原則に比してアウト、という意味だ。

自衛隊を派遣する基本方針として規定された国際平和協力法によれば、以下の５つの原則が確保されていなければならない。

①紛争当事者間の停戦合意の成立
②紛争当事者の受け入れ同意
③中立性の厳守
④上記の原則が満たされない場合の撤収
⑤武器使用は必要最小限

あまりの衝突の激しさから出た言葉は、政治的な解釈を抜きにした隊員の正直な心境だった。

声を発した隊員と一瞬目が合った。彼はその後何も言わなかったが、目が何かを訴えていた。

不用意に屋外に出ることは禁じられていた。隊員食堂は完全に閉鎖。食事はもっぱら、カロリー増加のために個人に支給される増加食のカップラーメンやスナック菓子だった。隊本部に置いてあった夜食用のお湯を注ぐと食べられるインスタント牛めしは人気があり、直ぐになくなってしまった。しばらくの間は、まともな食事はとれないだろうと諦めていた。空腹でないだけマシだった。

第４　結語

前回（第１２回）弁論でも述べたとおり、認否・反論しないという被告の応訴態度が続くが、原告の事実主張及び法律主張は基本的に尽くされており、証拠調べに入るべき段階にある。

その際に必要かつ重要なものが、第１０次隊派遣当時における南スーダン情勢と派遣部隊の活動実態であり、当時起きたジュバ・クライシスの実態であり、その後の国連安保理やＵＮＭＩＳＳの情勢認識や対応方針である。

原告は、これらの事実に基づいて、これ以上の派遣は明らかにＰＫＯ参加５原則に反し、隊員を深刻な危険に晒すとして、２０１６年１１月３０日第１１次隊の派遣差止を求めて本訴訟を提起したのである。

以上より、速やかに、第１０次隊の「日報」「衛生週報」について文書提出命令を発するとともに、証人尋問にむけた準備を進めていくことを求める。

以上